

## 要 旨

主体的に活動に取り組む子どもの姿を願えば、子どもが「自分から」「自分で」取り組めるように支援をよりよいものにする必要があり、常に子どもへの支援を振り返ることが重要となる。本研究では、生活単元学習等の授業の後に、研究グループで作成した支援を振り返るための「みるみるシート」を用い、その日の支援の反省をし、次の支援をどうするかを検討するための話し合いを行った。その結果、教師の子どもへのかかわりや、補助具の有用性、場の配置の工夫など、要点を押さえた話し合いとなり、個に応じたよりよい支援の改善へとつながった。

〈キーワード〉 ①自分から、自分で ②できる状況作り ③みるみるシート

## 1 研究の目標

特別支援学校における生活単元学習において、主体的に活動に取り組む子どもの姿を実現する支援となり得たかどうかを確認するための「みるみるシート」を作成し、活用することを通して、個に応じた支援の在り方を探る。

## 2 目標設定の理由

特別支援教育を実施するためには、教師一人一人の障害のある子どもに対する理解や指導上の専門性を高めること、組織として一体となった取り組みが可能となるような学校内での支援体制を構築することが重要である。

学校現場においては、子ども一人一人の様子を的確につかみ、そこから子どもの教育的ニーズを把握した上で、活動中の課題を設定し、子どもがその課題を達成できるように支援内容を考える。そして、活動中においては、子どもが活動する上でつまずきはないか、子どもはもてる力を十分に発揮できているかなど、子どもの取り組みの様子を的確に見取る。そして、子どもの活動する姿を通して、これまでの支援内容を検討し、よりよい支援となるようにしている。

ただ、活動期間中、複数の教師で支援について再検討する時間や場を確保しづらく、具体的な支援の変更は、担当教師の見取りに頼ることが多い。また、検討の機会があっても、要点が押さえられないまま話し合いの時間が過ぎてしまうこともある。

そこで、本研究では、複数の教師が同じ観点をもって子どもを見取り、支援をよりよいものへと改善するために活用できる「みるみるシート」を作成する。これらを通して、子ども一人一人が主体的に活動に取り組むための個に応じた支援の在り方を明確にしたいと考え、本目標を設定した。

## 3 研究の内容及び方法

- (1) 生活単元学習について、先行研究や文献の調査を基に、子どもが主体的に活動に取り組むための支援の在り方と、その観点についてまとめる。
- (2) 支援の在り方と観点のまとめから、支援の実施及び振り返りに必要な観点について研究グループ内で検討し、「みるみるシート」を作成する。
- (3) 授業において「みるみるシート」を活用し、活動への支援の最適化を図るとともに、「振り返りのための観点」を検証し、「みるみるシート」をよりよいものに改善する。
- (4) 子どもが主体的に活動に取り組むための支援の在り方について検討する。

## 4 研究の実際

### (1) 理論研究

#### ア 領域・教科を合わせた指導，生活単元学習について

障害のある子どもの学習では，学習領域や教科別に分けずに，子どもの様子に即する形で学習内容を包括的に編成し，活動を選ぶことが効果的とされている。また，その内容としては，生活に結び付く具体的な活動を中心に据え，実際の生活と同じような環境で行うことが重要と言われている。さらに，学習を通して，学校生活を含む子どもの日々の生活の質が高まっていくように，活動内容を工夫することも必要である。そのためには，子どもが自信をもって活動をやり遂げ，達成感・満足感を味わえるように，教師は，教材や道具などを子どもの様子に合わせて使いやすいものにする，といった教育的な支援が必要である。

生活単元学習は，領域・教科を合わせた指導の代表的な指導形態の一つである。この学習では，子どもの興味・関心や生活する中での思い，問題意識など，子どもが实际的・具体的な課題としてとらえやすい物事を学習テーマの中心に据えて単元計画が行われる。そして，子ども一人一人が現在もっている力を生かしながら集団で活動に取り組み，自分たちの手で課題を解決していく学習活動である。子どもは，生活上の課題を中心に据えた活動を通し，満足感や達成感を味わい，今の生活を充実したものと感じるようになることとされている。これまでの実践から，このような経験の積み重ねが，子どもの期待される将来の生活につながると考える。

#### イ 教育的な支援と「できる状況作り」

小出進は，「子ども主体の教育を求めれば，必然的に子ども主体の学校生活の実現を目指すこと」<sup>1)</sup>につながると述べている。そして，「本来の生活に主体的に取り組むことを，質の高い生活の基本条件」<sup>2)</sup>と考え，そのためには子どもが「主体的に生活し，活動できる状況作りとしての支援に，目いっぱい力を注ぐこと」<sup>3)</sup>が教師にとって重要であると述べている。

子どもが課題を解決していくためには，子どもの現在もっている力をその活動内容に十分に生かし，意欲的に取り組み，成し遂げられるような配慮，教育的な支援が必要となる。

活動を実践するとき，教師は子どもの思いを大切にしながら，子どもの様子を十分に見取る。そして，子どもが現在もっている力を生かしながら取り組めるような活動内容を検討し，子どもの役割を考える。その上で，子どもが活動に取り組む際に，達成してほしい，やり遂げてほしいと思う目標，つまり「ねがい」を考えることになる。

この「ねがい」を達成するには，文献研究やこれまでの学校での取り組みから，表1のような支援が必要であると考えた。

表1 必要と考える支援

- ・ 子どもが活動に見通しをもち，精一杯取り組み，その結果を楽しみにできる活動計画
- ・ 子どもの活動が滞ることなく，また，仲間とのかかわりかかわりを意識しながら活動できる環境
- ・ 子どものもっている力を生かし，活動をやり遂げられる教材や道具，補助具の準備や工夫
- ・ 子どもと共に活動しながら，子どもの困っていることにさりげなく支援ができる教師のかかわり

このように，子どもが自分でできるように支援を整えていくこと，つまり教師による「できる状況作り」が，障害のある子どもの主体的な取り組みの実現には大切なことといえる。

子どもがその活動をできたかどうかということの問題視するのではなく，子どものための「できる状況作り」を教師が用意できたかが，子どもの学習活動や生活に大きく影響すると考えた。

### (2) 「支援の観点」の再検討と「振り返りのための観点」の設定

「できる状況作り」の考察で求められた支援に関する内容を基に，平成18年度の先行研究でまと

められた「支援の観点」を研究グループの中で再検討した。そして、支援をよりよいものにしていくための「振り返りのための観点」を設定した。その後、「振り返りのための観点」を基に「みるみるシート」を試作し、事例研究を通して試行した。

### (3) 制作活動を通じた事例研究

単元「がばい！仲良しライブをしよう」において、「みるみるシート」の試用を行った。中学部のA児が取り組む「ペットボトルマラカス作り」や「ダンスで使うお面作り」において、「支援の観点」を基に具体的な支援を準備した。そして、活動終了後、「振り返りのための観点」を基にA児の取り組みの様子と、次の活動で改善が必要とされる支援について、「みるみるシート」を試用しながら、所属校の教師とともに検討を行った。

#### ア 「ペットボトルマラカス作り(授業1)」でのA児への支援とその振り返り

これまでにA児は、はさみを使った活動に何度も取り組んでいる。また、切り取り線をよく見て切っている姿も見られた。このことから、A児は、ペットボトルマラカスの制作工程の中で、ペットボトルをはさみで輪切りにする活動に取り組むことになった。本活動でのA児への支援として、ペットボトルが転がって活動が途切れてしまわないように、固定台を用意することにした。活動中、A児は「上手にペットボトルを輪切りにし、1つを切り終わると、次のペットボトルを自分から手に取って切り始める」というように、活動全体を通して主体的に取り組んでいる姿が見られた。しかし、その様子を細かく見ていくと、次第に、はさみを持つ手が不自然に曲がり、切るペースがゆっくりになり、そのうちに、固定台を使わず、ペットボトルを手に持って切るようになった。この様子を、「みるみるシート試作(以下、試作)①」を使って支援を振り返り(図1)、その後の検討会で協議することにした。

( A児 ) への支援		記入者( )			
<p>「がばい！仲良しライブをしよう！」 細かい指先を使ったような活動は苦手ではあるが、活動内容や手順がわかると、自分で工夫して活動に取り組もうとしている。 また、一日の目標がわかると、マイペースで活動に取り組んでいる。 作業学習では、シンで布袋を縫う活動に時間いっぱい取り組む姿が見られた。 逆にこくまれではあるが、時間の過ごし方がわからないと、自分から活動に取り組まずにじっと待っていることがあった。</p>					
<p>● できること・好きなこと など(様子・声)</p>					
<p>◆よりよい支援のための、観点とその評価ポイント</p>					
観点について	子どもの様子	観点の評価ポイント	子どもの様子		
「できることを生かした方法」	子どもの様子を見取りや過去の経験から考えた、できることを生かした方法、できそうな方法	>>	自分から活動に取り組もうとしていたか 自分からもてる力を生かして取り組んでいたか 自分で活動をやり遂げていたか		
「教材・教具・補助具の工夫」	使いやすい教材、自分で安全に使える道具、活動を助ける補助具の工夫	>>	安全に使っていたか スムーズに使っていたか		
「活動の見通し」	1日の生活や授業の流れ、1つの活動に関する見通しがもてるような工夫	>>	活動の始まりと終わりがわかっていたか 自分から活動の流れに沿って取り組んでいたか		
「場の配置」	子どもが動きやすく、活動の流れが円滑になるような場の配置	>>	自分で準備や後片付けができたか 活動の流れが円滑であったか		
「教師のかかわり」	教師も子どもともに活動しながらの、子どもの思いに沿ったかかわり	>>	かかわりの「量」 かかわりの「質」 かかわりの「タイミング」		
日付	活動内容	支援の観点	支援(手立て)など	支援の評価と気付き	改善ポイント
		教材・教具・補助具の工夫	固定台(転がり防止)	○ 固定台(スチロール製のブロック)は、場面によっては使いつらい。	○ 固定台は「使わなくてもいいよ」と伝える。

図1 「みるみるシート試作①(部分)」での振り返り

検討会でも「教材・道具・補助具の工夫」の観点から、固定台について、「使いづらそうだった。」「なくてもよいと思う。」などの意見が聞かれ、次の活動では、A児の使いづらそうな様子が見られるならば固定台は外すということになった。

さらに、「固定台を外すことを、A児自身が選べるような教師のかかわりがあってもよかったですのではないか。」「固定台を使うかどうかを自分で判断し、決定するような場面を設定することで、より主体的なA児の姿が見られるのではないか。」という意見も挙げられ、「教師のかかわり」の観点についての検討へと発展していった。

#### イ 「ダンスで使うお面作り(授業2・3)」でのA児への支援とその振り返り

##### (ア) A児の活動内容

単元「がばい！仲良しライブをしよう」でのステージ発表をめざし、グループで発表の練習と、発表のときに使う用具作りをすることになった。用具作りで、A児は、お面作り・衣装作り・うちわ作りの活動の中から、お面作りの活動を自分で選び、取り組むことになった。

(イ) 1日目のA児の様子

お面作り初日であったため、初めに教師から塗る色の指定について説明を行った。その後、すぐにA児はお面作りに取り組み、説明通り手を止めることもなく色塗りの活動に取り組んでいた。しかし、続けて何枚も色塗りを続け、自分から切る活動に切り替える姿が見られなかった。そこで、教師が色塗り活動のきりのよいところで、色塗りを続けるかはさみで台紙を切るかを尋ねたところ、A児は、「(今日は)色塗りを続けます。」と答え、色を塗る活動に引き続き取り組むことを希望した。

(ウ) 授業の振り返り

a 担当教師の振り返り

A児の様子を、「試作②」を用いて振り返った(図2)。計画していた色塗りと切る活動のうち、切る活動ができなかったことを受け、「活動の見通し」の観点から、翌日のお面作りの活動は、色塗りの手際などを考え、10枚のお面を作る(色塗りと切る活動に共に取り組む)ように予め材料を準備し、活動前にA児と確認しようと考えた。

b 他の教師との振り返り

放課後、お面作りの活動にかかわる教師が集まり、授業の様子を振り返った。A児の活動について、「活動の見通し」の観点から、「1日にお面を10枚も作れるか。」「活動量が多くないだろうか。」という意見が聞かれた。そして、A児が日頃から腕時計を見て、教室を移動したり、活動を切り替えたりしている様子から、「自分で進み具合を考え、お面の枚数を自分が決める、ということが大切ではないか。」という意見が出た。そこで、翌日の準備として、多めのお面の台紙を用意し、活動に取り掛かる前に、その日に何枚のお面を作るかを教師が尋ね、A児が自分で活動量を決める、とした。

(A児)への支援		Day1		記入者( )	
支援の観点	具体的な支援(手立て)	振り返りのための観点	Go / Stop	支援の評価と気持ちなど	
活動の見通し	<ul style="list-style-type: none"> <li>教師の作例を見える場所に置いておく</li> <li>作った後にそれを身に付けて頭ってみよう</li> <li>と伝えておく</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>活動の始まりと終わりが分かっていたか</li> <li>自分から活動の流れに沿って取り組んでいたか</li> </ul>	-	<ul style="list-style-type: none"> <li>次回は10枚の色塗りを、10枚分の台紙を用意する。</li> <li>時計を見ていることがある</li> <li>自分で決めてもいいのではないかと(時間を見て)</li> </ul>	
1日の生活や授業の流れ、1つの活動に関する見通しがもてるような工夫			○		

  

(A児)への支援		Day2		記入者( )	
支援の観点	具体的な支援(手立て)	振り返りのための観点	Go / Stop	支援の評価と気持ちなど	
活動の見通し	<ul style="list-style-type: none"> <li>1日分の色塗りの台紙を多めに用意する。(何枚作るか聞く)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>活動の始まりと終わりが分かっていたか</li> <li>自分から活動の流れに沿って取り組んでいたか</li> </ul>	○	進み具合と、時計を見比べて、自分で選んでいた。	
1日の生活や授業の流れ、1つの活動に関する見通しがもてるような工夫			○		

図2 「みるみるシート試作②(部分)」での振り返り

その日に出た。そこで、翌日の準備として、多めのお面の台紙を用意し、活動に取り掛かる前に、その日に何枚のお面を作るかを教師が尋ね、A児が自分で活動量を決める、とした。

(エ) 2日目のA児の様子

A児は、ダンスの練習が終わると、自分で材料箱や道具箱を用意し、活動に取り組んでいた。

教師は、A児の色塗りのペースを基に、時計を見ながら声を掛けるタイミングを図った。お面4枚分の色塗りが終わったところで、あと何枚色を塗って、はさみで切り取るかを尋ねた。すると、A児は「あと1枚塗ってから(その後、はさみで切る。)」と答え、材料箱から台紙を1枚取り、色塗りに取り組んだ。最後の1枚の色塗りが済むと、A児は自分からペンを片付け、はさみが入っている道具箱を用意し、何種類かあるはさみの中から自分の手に合ったはさみを選び、台紙の切り取り線に沿ってお面を切り始めた。

色塗りが済むと、A児は自分からペンを片付け、はさみが入っている道具箱を用意し、何種類かあるはさみの中から自分の手に合ったはさみを選び、台紙の切り取り線に沿ってお面を切り始めた。

色塗りが済むと、A児は自分からペンを片付け、はさみが入っている道具箱を用意し、何種類かあるはさみの中から自分の手に合ったはさみを選び、台紙の切り取り線に沿ってお面を切り始めた。

色塗りが済むと、A児は自分からペンを片付け、はさみが入っている道具箱を用意し、何種類かあるはさみの中から自分の手に合ったはさみを選び、台紙の切り取り線に沿ってお面を切り始めた。

色塗りが済むと、A児は自分からペンを片付け、はさみが入っている道具箱を用意し、何種類かあるはさみの中から自分の手に合ったはさみを選び、台紙の切り取り線に沿ってお面を切り始めた。

色塗りが済むと、A児は自分からペンを片付け、はさみが入っている道具箱を用意し、何種類かあるはさみの中から自分の手に合ったはさみを選び、台紙の切り取り線に沿ってお面を切り始めた。

その後のダンスの練習では、自分で作ったお面を友達に渡したり、友達の頭に乗せてあげたりするような場面が見られた。

ウ 所属校教師による「みるみるシート」を活用したA児への支援とその振り返り(授業4・5)

所属校教師に「みるみるシート」の説明を行い、単元「開店!ゆめショップ おおぞら」での活動で、シートの試行を通して、子どもの活動における支援の振り返りと改善に取り組んだ。その後、「みるみるシート」に関して、所属校教師に対し、アンケートを行った。

(ア) 支援の振り返りと改善

A児は、これまでの経験を生かし、自分でミシンと材料を準備した後、自分から袋縫いの活動に取り組んだ。しかし、作業のペースが上がらず、A児が1日の目標にしている枚数に達していないことがあった。

そこで、検討会で「試作③」を用いて、支援について振り返りを行った(図3)。

当初は、「教師のかかわり」の観点から話し合っていたが、「A児が布を取ってからミシンで縫い始めるまでの時間が長い。」ということに気が付いた。なぜ時間が掛かっているのか

を他の教師の見取りと合わせて協議したところ、縫い始めの位置が確認しづらく、その箇所を探していることに時間が掛かっているということが分かった。このことを改善するため、「教材・道具・補助具の工夫」の観点から、「縫い始めの位置を見付けやすいように、目立つ色の小さなシールを張ってみてはどうか。」というアイデアが出され、準備に取り掛かった。

次の日、A児は袋縫いをする際、丸シールを基に縫い始めの位置をすぐに見付けられるようになり、活動の終わりには、1日の目標の枚数を確実に仕上げられるようになっていた。

(4) 「みるみるシート」の試作と試行を通して

5回の授業において、「みるみるシート」を試行した。

授業1では、「試作①」を試行した(p.133図1)。振り返りのための観点を設定したことで、要点を押さえた振り返りができた。また、そのことで「教材・道具・補助具の工夫」や「教師のかかわり」に関する支援が改善でき、子どもの主体的な姿を見いだすことができた。

しかし、観点欄と記入欄が散在しており、観点を参照しながら記入しづらいという課題が残った。

そこで、研究グループでの観定の検討と同時に書式を変更し、「試作②」を作成し(前頁図2)、授業2・3で試行した。

その中で、「教師のかかわり」の観点、「かかわりの『量』・『質』・『タイミング』」について、「子

みるみるシート ~側に応じた、よりよい支援のために~				
【 】さんへの支援&振り返り 記入者( )				
月 日 ( )				
本時の目標 (様子とねがい)				
活動内容				
観点	考えられる支援	振り返りの観点	O or X	改善点や気づき
● 教師のかかわり 教師も子どもと共に活動しながら、子どもの思いに沿って、「自分から」「自分で」取り組む姿を大事にしたかかわりをする	○ 共に取り組む ○ 見守る ○ 待つ ○ 勇気を作る ○ 誇り ○ 認める ○ 声を掛ける ○ 伝える ○ 共に喜ぶ	子どもが判断し、選択し、決定して、自分から始めようとする姿を大事にできたか 子どものつまずきに気づき、つまずきの原因を取り除くかかわりをしたか 子どもが自分の力でやり遂げようとする姿を助げなかったか		
観点	具体的な支援	振り返りの観点	O or X	改善点や気づき
● できることを生かした方法 子どもの様子を見取りや過去の経験から考えたできることを生かした方法、できそうな方法		自分から活動に取り組もうとしていたか もっている力を自分から生かして取り組んでいたか 自分で活動をやり遂げていたか		
● 教材・道具・補助具の工夫 使いやすい教材、自分で安全に使える道具、活動を助ける補助具の工夫		安全に使っていたか スムーズに使っていたか		
● 活動の見直し 1日の生活や授業の流れ、活動に関する見直しもてるような工夫		活動の始まりと終わりが分かっていったか 自分から活動の流れに沿って取り組んでいたか		
● 場の配置 子どもが動きやすく、活動の流れが円滑になるような場の配置		自分で準備や後片付けができたか 活動の流れが円滑であったか		
● 活動メモ				

図3 「みるみるシート試作③(全体)」

どもの姿を通して教師のかかわりが適切だったかどうかを振り返ることは難しい。」「振り返りのための観点の言葉の意味がつかみづらい。」という意見が出てきた。

このことを受け、グループ研究で得た観点を再度検討し、子どもの「自分から」「自分で」取り組む姿を大切にすることが、「教師のかかわり」の基本であることを分かりやすくするために、「考えられる支援」と「振り返りの観点」を設定することにした(前頁図3)。加えて、この観点は、支援を行う上で子どもを見取る根幹になるものであると考え、シートの上に配置することにし、「試作③」を作成した後(前頁図3)、授業4・5で試行した。

「試作③」について所属校教師からアンケートを採ったところ、よかった点として、「支援を振り返る切っ掛けになった。」「具体的に話し合う際の役に立った。」という意見があった。このことは、これまでは、教師の記憶や自由記述による子どもの記録などを基に話し合われることが多く、協議の柱が漠然としていたために内容が絞り込めていないことが多かった。それが、「みるみるシート」にて観点を明示することによって、より具体的で焦点化された協議となり、支援の改善につながったことを意味していると考ええる。

しかし、活用上の問題として、「話し合いや記入の時間がない。」「記入する際に時間が掛かる。」という意見があった。実際の現場においては、材料や道具などの準備や会議等で時間が費やされることが多く、一人一人の支援について新たに時間を設けて話し合うということが難しい。シートの表記や内容について、現場の状況に対応できるものへと改良する必要がある。

## 5 研究のまとめと今後の課題

理論研究から、子どもが主体的に取り組む姿を学校現場で実現するためには、子どもの思いを大切に、学校生活での取り組みをより現実に近いものにすることが、子どもの生きる力につながることを確認できた。また、そのためには、個に応じた「できる状況作り」が必要であること、さらに、「できる状況作り」を日々振り返り、支援を整えていくことが重要であることが分かった。

研究グループにおいて設定した「振り返りのための観点」を「みるみるシート」にまとめ、試用した。そのことで、教師の考える支援が個に応じた支援であったかどうかを客観的に振り返られるようになり、要点を押さえながらよりよい支援へと改善できるようになった。

このように、子どもへの支援を改善し、活動内容を整えたことで、子どもが自分から活動に取り組む、自分でやり遂げたことを喜び、活動できたことに満足する姿が見られた。

「みるみるシート」について、記入や時間の確保に課題は残ったが、観点を明記することで、より個に応じた支援の検討に生かせることが本研究で分かった。今後は、実際の現場において活用し、より実用的なものにしていきたい。

### 《引用文献》

1)2)3) 小出 進 『生活中心教育の原理』 2002年 ケーアンドエイチ p.35

### 《参考資料》

- ・文部科学省 「特別支援教育を推進するための制度の在り方について(答申)」  
平成17年12月
- ・木村 宣考 他 『生活単元学習を実践する教師のためのガイドブック』  
国立特殊教育総合研究所 平成18年  
[http://www.nise.go.jp/kenshuka/josa/kankobutsu/pub\\_b/b-198.html](http://www.nise.go.jp/kenshuka/josa/kankobutsu/pub_b/b-198.html)  
(2008年3月)